大学入試
実戦国語
現代文・記述・小論文

見本

現代文 記述・小論文

1

次の文章は『椿の主題による工芸的文明論』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。（東京大）

解答・解説⇩別冊58ページ

椿を主題とする漆器や彫金、木彫や陶磁器、染織や絵画、そうしたものの安土、桃山から江戸にかけての様々な作品の写真を繰りかえし眺めているあいだに、私はおのずとそうしたものが作られた文明の雰囲気のなかへ自分が溶け入って行くのを感じていた。

それは確実にひとつの純粋な文明の雰囲気であり、そして二十世紀の現在の日本文明とは異質の世界である。しかしその雰囲気が現代と異なっているといっても、決して私の感受性に対して違和感を与えるものではなく、むしろ逆に1私の心を優しく和ませてくれる。そしていつか幼い頃にこのなかで静かに眠ったことがあるという、快い思い出のような匂いを伴った世界なのである。

そこにはこちらの認識力を鋭くとぎ澄まそうと迫ってくるような作者の個性的な主張、また独自な観察眼によって今まで私たちに気づかれていなかった椿という植物のaイソウガイな形姿、というようなものはない。

現実的な観察とそれにもとづいた個性的な描写という近代芸術の手法は、私たちを不安にさせる。それは対象と私たちとのあいだに長いあいだに出来あがっていたある型のようなもの——それが心に平和をもたらすのだが——を対象から引き剥いで、それを全く新しいイメージとして改めて突きつけてくるからである。私たちは従来知っていた——この場合には椿という花——とは別な何かに目覚めさせられ、私たちが今まで椿だと決めこんでいた映像は偽のものに過ぎなかったのだ、と宣言しているように思われるからである。

近代というのはそうした時代であり、近代芸術は私たちのまわりから長い時間が作りだしてくれていた心を安めてくれる型をいちいち破壊して、もう一度、2虚無のなかから現実像を発見し直すように私たちをbキョウヨウする。

そうして、人々は近代芸術に慣れ親しむにつれて自分の感受性がcスンダンされ、自分が孤独な存在として世界のなかに宙吊りになっている、という悲痛な思いに捉えられるのである。

しかし、そのように私たちを孤独にするものだけが芸術なのではない、とこれらの漆器や彫金は私たちに語りかけてくれる。

たとえば、椿を尾長鳥がくわえて飛んでいる釘隠しであるが、この鳥の左右に拡げた双称的な翼と、また下へ向かって垂直に

のびた長い尾との作りだす形の安定は、その羽根の並びの規則的な重なりと相まって見る人の心を快い落ちつきに誘ってくれる。

ここでは鳥が空気を裂く運動や、その空気の抵抗が羽根に与える毛ばだちや、といった近代的なレアリスムの感覚は、多分、芸術的な気品のなさとして作者の視線のなかであらかじめ整理され切り捨てられている気配がある。そのような生なものをそのままこうした工芸品に持ち込まないことが芸術家の心ばえであるという3倹(つつ)ましい古風な信念がそこに感じられて、私たちをのびやかにさせてくれる。

しかしそれはそうした生のものにはじめから工芸家が鈍感であったというのとはちがう。その証拠には翼のしたに深くまげられた鳥の頸(くび)の勁(つよ)さは、まさにその運動の瞬間において工人がこの全体のイメージを捉えたのだということを明らかに示していて、それが私たちに芸術的な快さを与えてくれるのである。この鳥はたしかに生きていて、椿の枝をしっかりとくわえているのだ。彫刻家ののみのdソホウさによって危うく枝を切りおとしそうな印象を与えることなどあり得ないのだ。

もし、今にも椿の枝が地面に落下しそうに不出来に仕上がっているとしたら、このデザインは釘隠しという実用的な用途には不向きだということになる。不向きであろうが何だろうが見たままを造形化するのだ、という近代的な写実主義的な4強情さはこの工人とは無縁である。

（中村真一郎「記憶の森」）

問一　傍線部1「私の心を優しく和ませてくれる」とあるが、それはなぜか、理由を説明せよ。

問二　傍線部2「虚無のなかから現実像を発見し直す」とはどのようなことか、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部3「倹ましい古風な信念」とはどういう信念か、わかりやすく説明せよ。

問四　傍線部4「強情さ」とあるが、この表現には筆者のどのような感情がこめられているか、文章全体から判断して説明せよ。

問五　傍線部a～dの片仮名に相当する漢字を楷書で示せ。

a　イソウガイ　　b　キョウヨウ　　c　スンダン　　d　ソホウ

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（北海道大）

例えばこの頃は文明という言葉を余り聞かなくなった代わりに文化というのがやたらに目に付く。これは文化という言葉を文明の意味に使うのが普通になったのであるよりも、そこは言葉とそれが指すものの縁がまだ切れず、文明という言葉で表されるものに少なくとも表面は関心を持つものがいなくなったのに対して、文化というのが一般に人の注意を惹くことになったためと考えられる。この二つは同じではない。

文明と文化の何れも漢籍に出て来る由緒ある言葉であるが、これが明治以後に日本で使われ出した例では文化の方が遙かに後で既に文明という言葉があっての文化であるからもう少し正確にその時期を示して大正になって文化ということが言われるようになった時に、これは何か文明以外のもので一種のなくても構わない、しかしもしあればどこか洒落ているというふうなものを指し、実はそれでそのまま今日に至っている。そうすると今日ではその文化の方に関心があるというのは、そういうなくてもよくて、それでもあれば飾りになる性質のものに人が惹かれるか、あるいは惹かれるのが本当であると考えられていることになり、これは生憎その通りなのである。これに対して次に文明はということになるが、これは具体的な例で説明出来る。我々人間が都会で集団を作って生活する時に、めいめいに家があって庭があるか、あるいは集団で住む建物と公園があるのは人間にとってなくてはならないことで、その上で築かれる人間の生活は文明の同義語であり、これに対して、もし自分の所の庭や集団用に建てられた住宅の屋上かどこかに他所に行かなくても泳げる設備をするならば、別にそのようなものがなくても誰も困りはしなくてそれでもあって悪くはないものであるからそれが文化である。

自分の家に庭がなくてその代わりに毎朝起きて眺められる公園もないのに泳ぐ設備、あるいは何か競技をしたりして暇が潰せる設備は手近にあるという状態を思う時に文化という言葉が今日の我々にとって持つ意味が漸くはっきりして来る。我々には集団で暇潰しをする設備がいくらでもあって、見方によっては日本国中がそうした設備にあてられている感じがしてそれが文化に違いないが、こうなるとこの暇潰しと同義語でまた言葉の定義からしてそうである他ない文化というものがどこか1化けもの染みた仕掛けの印象を与えることになるのを免れない。もともと暇があるからそれを消す気も起こすのでその暇があるためにはまず自分の生活がしっかりしたもので、自分に人間らしく振る舞うことを許すもの、つまり文明に根をおろしたものでなければならない。しかし木の緑を日常眺めることも出来なくて泳ぐ設備の水面が人の頭で埋まるのはいつでも見られるというのが生活だろうか。

解答・解説⇩別冊60ページ

確かなことは我々にとってなくてはならないもの、例えば空気とか木の緑とか日光とかは我々の生命とともにあるものだけに目立たなくて何も言わずにまた人に迷惑をかけずに楽しむこと、その時間を生きることを我々に許し、これに対して極彩色の日傘を立てた下に集まってまわりに並ぶ極彩色の日傘の下に集まったものを眺めるのは既にそこに時間が流れていないということである。それ故にそこにあるものは喧噪でしかない。そうしたことをするのがこの頃は余暇を楽しむことであることになっているようであるがこれは言葉の誤用であって、それは余裕を初めから失っているのであるから余暇ではなくて従ってまた、2余暇でないその何かを楽しんでいるのでもない。もっと正確に言えばこれは自分に生活と呼べるほどのもの、ただ或る場所にいるだけで時間が少しずつ過ぎて行くのを感じていられる余裕がなくてそれに堪えられなくて気を紛らすことを求めての狂態である。ついに文化は狂態に過ぎなくなっている。

しかしそういうことにばかり気を取られているのでは文化という化けものにまた一つ3凱歌をあげさせるだけのことである。一般に表と裏という時には表は見てくれがよくて結構づくめであるがその裏はという意味に取られる。しかし事実はその逆であるはずで表は表であるから見てくれがよくても悪くても人目を惹いても、本当のことはその表が隠している下に求めなければならなくて、日本国中が暇潰しの設備に覆われて文化づくめであってもそれが日本であることにはならない。4大概の鉱物の表面は銹で覆われている。日本国中が暇潰しの場所になっていない証拠に我々は今日の日本に生きていて別に日傘が立っている下に行く必要を感じないでいる。我々に生活がないとは言えない。現に我々は冷房でない冷たい風が吹くのを知っていていつの間にか朝の食事に向かっている。それが冬ならば火がある。余り話が面倒なことになって来た時は身のまわりを見回すのも一案でそれで我に返る。

（吉田健一「文明と文化」）

問一　傍線部1「化けもの染みた仕掛け」はどういう状態をいうのか。具体的に二十字以内で説明せよ。

問二　傍線部2「余暇でない……のでもない」について、「何か」を明らかにして二十字以内で説明せよ。

問三　傍線部3「凱歌をあげさせる」について、そうさせないためにどうすればよいと筆者は考えているか。三十字以内で記せ。

問四　傍線部4「大概の……覆われている」について、「鉱物」は何を比喩しているか。本文中の熟語で答えよ。

問五　本文の筆者は「文明」と「文化」の関係をどう考えているか。「生活」「時間」という言葉を用いて百字以内で記せ。

次の文章の内容について考えたことを六百字以上千字以内で自由に述べよ。（早稲田大・文）

解答・解説⇩別冊62ページ

さて私は老人からいろいろ話をきいている間に、この村には古くから伝えられている帳箱があり、その中に区有文書がはいっていることを知った。そこでそれを見せてくれないかとたのんでみると、自分の一存ではいかぬという。帳箱には鍵がかかっており、その鍵は区長が保管しているが、総代立ち会いでないとあけられないという。それでは二人立ち会いの上で見せていただけないかとたのむと老人は人をやって寄りあいの席から二人をよんで来た。事情をはなすと開けて見せる位ならよかろうと、あけてくれた。その夜は宿で徹夜でその主要なものをうつしたが、実は旅のつかれがひどいので能率はあがらない。翌朝になって、「この古文書をしばらく拝借ねがえまいか」と老人の家へいってたのむと、老人は息子にきいてみねばという。きけば今日も寄りあいのつづきがおこなわれていて息子はその席へ出ているとのことである。そしてまた人をやってよんで来てくれた。すると息子はそういう問題は寄りあいにかけて皆の意見をきかなければいけないから、借用したい分だけ会場へもっていって皆の意見をきいてくるといって、古文書をもって出かけていった。しかし昼になってもかえって来ない。午後三時をすぎてもかえって来ない。「いったい何の協議をしているのでしょう」ときくと、「いろいろととりきめる事がありまして……」という。その日のうちに三里ほど北の佐護まで行きたいと思っていた私はいささかジリジリして来て、寄りあいの場へいってみることにした。老人もついていってくれる事になった。いってみると会場の中には板間に二十人ほどすわっており、外の樹の下に三人五人とかたまってうずくまったまま話しあっている。雑談をしているように見えたがそうではない。事情をきいてみると、村でとりきめをおこなう場合には、みんなの納得のいくまで何日でもはなしあう。はじめには一同があつまって区長からの話をきくと、それぞれの地域組でいろいろに話しあって区長のところへその結論をもっていく。もし折り合いがつかねばまた自分のグループへもどってはなしあう。用事のある者は家へかえることもある。ただ区長・総代はきき役・まとめ役としてそこにいなければならない。とにかくこうして二日も協議がつづけられている。この人たちにとっては夜もなく昼もない。ゆうべも暁方近くまではなしあっていたそうであるが、眠たくなり、いうことがなくなればかえってもいいのである。ところで私の借りたい古文書についての話しあいも、朝話題に出されたそうであるが、私のいったときまだ結論は出ていなかった。朝から午後三時まで古文書の話をしていたのではない。ほかの話もしていたのであるが、そのうち古文書についての話も何人かによって、会場で話題にのぼった。私はそのときそこにいたのでないから、後から概要だけきいた話は、「対馬の調査

に来た先生が、伊奈の事をしらべるためにやって来て、伊奈の古い事を知るには古い証文類が是非とも必要だというのだが、貸していいものだろうかどうだろうか」と区長からきり出すと、「いままで貸し出したことは一度もないし、村の大事な証拠書類だからみんなでよく話しあおう」ということになって、話題は他の協議事項にうつった。そのうち昔のことをよく知っている老人が、「昔この村一番の旧家であり自分も高い給人（郷士）の家の主人が死んで、その子のまだ幼いのがあとをついだ。するとその親戚にあたる老人が来て、旧家に伝わる御判物（ごはんもの）を見せてくれといって持っていった。そしてどのように返してくれとたのんでも老人はかえさず、やがて自分の家を村一番の旧家のようにしてしまった」という話をした。それについて、それと関連のあるような話がみんなの間にひとわたりせられてそのまま話題は他にうつった。しばらくしてからまた、古文書の話になり、「村の帳箱の中に古い書き付けがはいっているという話はきいていたが、われわれは中味を見たのは今が初めであり、この書き付けがあるのでよいことをしたという話もきかない。そういうものを他人に見せて役に立つものなら見せてはどうだろう」というものがあった。するとまたひとしきり、家にしまってあるものを見る眼のある人に見せたらたいへんよいことがあったといういろいろの世間話がつづいてまた別の話になった。

そういうところへ私はでかけていった。区長がいままでの経過をかいつまんでひととおりはなしてくれて、なるほどそういう調子なら容易に結論はでないだろう。とにかくみんなが思い思いの事をいってみたあと、会場の中にいた老人の一人が「見ればこの人はわるい人でもなさそうだし、話をきめようではないか」とかなり大きい声でいうと外ではなしていた人たちも窓のところへ寄って来て、みんな私の顔を見た。私が古文書の中にかかれていることについて説明し、昔はクジラがとれると若い女たちが美しい着物を着、お化粧して見にいくので、そういうことをしてはいけないと、とめた書きつけがあるなどとはなすと、またそれについて、クジラをとったころの話がしばらくつづいた。いかにものんびりしているように見えるが、それでいて話は次第に展開して来る。一時間あまりもはなしあっていると、私を案内してくれた老人が「どうであろう、せっかくだから貸してあげては……」と一同にはかった。「あんたが、そういわれるなら、もう誰も異存はなかろう」と一人が答え、区長が「それでは私が責任をおいますから」といい、私がその場で借用証をかくと、区長はそれをよみあげて「これでようございますか」といった。「はァそれで結構でございます」と座の中から声があると、区長は区長のまえの板敷の上に朝からおかれたままになっている古文書を手にとって私に渡してくれた。私はそれをうけとってお礼をいって外へ出たが、案内の老人はそのままあとにのこった。協議はそれからいつまでつづいたことであろう。

（宮本常一「忘れられた日本人」）

4

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（慶応大・文）

「晩鐘」や「落穂拾い」などの作品で有名なフランスの画家ミレーは、みずから自身ノルマンディ地方の寒村に農民の子として生をうけ、十九世紀なかばの農民生活のかずかずを描写したことで知られている。このミレーの描いた情景が、眼のまえにふつうにみられるものではなくなり、歴史的過去の世界に属したものになるにしたがい、それらの作品は貴重な証言として、あらためて民族学や歴史学の観点から見なおされることになってきている。

十九世紀なかばの証言といえば、民俗研究家のものにせよ、行政官や医師などの社会的エリートのものにせよ、その多くは、伝承慣行にふかく根ざした農民たちの生活世界を、「遅れたもの」として近代的規範へと教育する対象とみるか、あるいは逆に、幻想にみちた「田園讃美」の対象とするか、であった。しかしミレーのまなざしは、それらとは異なっていた。苦しみや恐れや、きつい仕事の疲れ、あるいは依然として身近な死に刻印されながら、であるがゆえに同時に祈りや願い、そして歓びにもみちた農民たちの世界への、共感のまなざし、ないしは共有のまなざし、といえようか。

もちろんミレーはプロの画家であって、眼にしたものをそのまま映しとったわけではなく、美術史で問題とするような様式とか構図上の系譜に、いろいろな形でからんでいるのであろうと思われる。寓話などに題材をもとめた作品や、肖像画も、彼は描いているし、だいいち絵画をもっぱら証言としてながめるのは、鑑賞という点からすれば邪道かもしれない。しかし美術の観点からではなく、歴史民族学的な観点からすると、やはり農民生活を描いた彼の作品が、たいへん興味ぶかいのである。

たとえば有名な「晩鐘」は、日暮れどきをつげる村の教会の鐘をききながら、一日の仕事のおわりにあたって祈りをささげている、まだ比較的若い農民夫婦が描かれていることは周知であろう。しかしよくみると、妻の方は手を組みあわせ、深く頭をたれて一心に敬虔に祈っているようすであるのにたいして、夫の方は帽子を手にもって、ちょっと頭をさげているだけで、手を組みあわせてもいない。こういう描き方をみると、歴史学をやっている人間ならば、すぐに十九世紀なかばの宗教と教会をめぐる状況が、想起されるのである。つまり、比較的若い世代の男たちから、徐々に教会ばなれがおこっており、それを脱宗教化と一般化するのは飛躍だとしても、教会をささえる主力は、はっきりと女性たちに比重がかかっていた、という状況である。ミレーが、こうした状況をどこまで意識的に描きだそうとしたのかは、ミレー研究者ではない私には今のところよくわからないが、少なくとも彼の描いた夫婦差のある情景が、その時代の一側面をよく映しだしていることは、たしかなのである。

解答・解説⇩別冊63ページ

そうしたミレーの作品に、「洗濯女」という絵がある。巨大な樽のような洗濯桶に、右手にもった壺から湯をそそいでいるたくましい女を描いた作品であるが、そういう表題がないと、われわれにはそれが洗濯の準備をしている光景とは、なかなか理解しがたい。おそらくそれは、現代社会に生きているフランス人にしても、とくに若い世代にとっては同様だろう。

いうまでもなく今では洗濯することは、日常茶飯のことであって、しかもたいていは電気洗濯機で行われていることは、日本でもフランスでも似たりよったりである。そして都会では、おなじようにコイン・ランドリーは盛況である。日本では、私ども敗戦直後に生まれた世代までにとっては、あの波形のギザギザのほどこされた洗濯板やたらいは、具体的な洗濯の情景と結びついて幼時の記憶に刻みこまれている。しかしそれ以後の世代にとってはおそらく、いまの子どもたちにとって火鉢などが絵や想像の情景にしかすぎなくなってきているのと同様、日常生活における洗濯の情景はまったく異なるものとして、したがって心象風景としてもまったくちがったものとして、あるのではないだろうか。

じつは、ミレーがその絵を描いた時代から今世紀のはじめにかけて、フランスの農民社会においては、洗濯という行為は日常茶飯のことではなく、象徴的な意味のこもった重要な「出来事」、つまり儀礼的行為ともいうべき性格をもっていたのである。日本での年末の大掃除が、年の移行をしるす年中行事として、いわば「通過」のための儀礼的性格をもったものであったのとおなじように、かつてのフランス農民社会において、年に一度とか二度とか行われた「大洗濯」は、たんに汚れを落とすという実用的機能をもったばかりではなく、季節の移行をしるす象徴的な行事でもあった。日頃もまったく洗濯がなされなかったわけではもちろんなく、たとえば赤ちゃんの衣類などが汚れたまま放置されることはありえないし、共同の洗濯場は女たちにとって、おしゃべりや情報交換のたいせつな機会を手にするところでもあった。しかしその回数はたいへん少なく、とりわけこの「大洗濯」のさいには、ためこまれたシーツなどが大量に洗われ、ところによってはそのために雇われた洗濯女が、社会的に独自な地位や象徴性をになっていた。あるいはミレーが描いたのは、こうした洗濯女であっただろうか。

だから洗濯のさいの手順や、桶のような道具の扱いについても、さまざまな決まりやタブーが存在していたのである。そして洗濯にとって欠かすことのできない水は、まだ蛇口をひねればでてくるといったものではなかったわけで、たいへん貴重でもあり、同時に象徴的な意味においても重要性をもっていた。人は、身体的誕生において産湯という形で水に接し、社会的誕生としての洗礼において、また水に接した。病いのさいには、しばしば泉の水が祈りをこめた治癒の手段とされ、死にゆくときには水で身体が清められた。しかも出産や洗礼に力添えする女、つまり産婆さんが、死にさいして水で身体を清める役割を

する女であり、しかもそれがまた洗濯女でもあるという、洗濯の象徴的な重要性をうかがわせる事例が、フランスの民族学者によってあきらかにされている。

もちろん実際面からすれば、洗濯はまさに衣類の汚れを取り除く作業である。けれども汚れとか、その逆に清潔さについて人びとが抱く感覚というものも、臭いや香りについてとおなじように、きわめて歴史的な文化的なものなのである。それは身体にたいする人びとのかかわりという点で、したがってまた身体にたいする統御の問題、つまるところは寛容の線引きと社会秩序の問題にかかわってくるものとして、一見ささいなようにみえて、きわめて重要なものといえる。おおむねこうした洗濯に示されているような民間伝承慣行のあり方は、近代的衛生の欠落、すなわち悪として、近代医療体制によって善悪二元論的に否認されてきたのだった。

ところが、洗濯の頻度がきわめて少なかったことが、汚れや衛生に関する無関心とか無神経を意味するのかというと、かならずしもそうではない。伝承慣行における身体の問題を研究しているフランソワーズ・ルークスの議論から考えると、この慣行はつぎの二点との関係でおさえるべきもの、ということになる。

ひとつは、ある種の汚れが身体にとって必要なものとみなされていた、ということである。たとえばいま問題にしている時期に、多くの民俗調査を残したポール・セビヨは、「私は、たいへん身ぎれいな農夫たちを知っていた。彼らは定期的に子どもの髪を櫛でといてやるのだが、しかし頭に二、三匹のシラミが残るように注意していた。強い子にするために、と。というのは、シラミは悪い血を食べてくれるからというのである」と報告している。汚れについても、それが身体の保護や、あるいは健康のためにすら必要とみなされていたことを示す事例が、いくつも報告されているのである。

もうひとつは、洗濯物である衣類は、その持ち主を表象するものであり、また汚れや垢は、ちょうど爪であるとか赤ちゃんのへその緒といった身体部分とおなじように、その人を代表して表すもの、あるいは一種の分身というふうにとらえられていた、という点である。だからその扱いは、気ままに意のおもむくままにしてはならず、それらを扱う慣行には、さまざまな身体の動きのなかにコード化された儀礼的な象徴性が刻みこまれている、という具合になる。

この洗濯の事例からもわかるように、近代的な規範とは別の次元で、経験的な実践的要素と象徴的要素とが不可分に結合する形で、伝承的に営まれてきた生活世界が、少なくとも今世紀はじめまでのフランス農民社会にはひろく看取しうるのである。それは、自然と文化との接点、ないしは自然と文化とを媒介するものとしての身体を軸に、みずからと、みずからをとりまく環界とを連環のなかにとらえている世界であった。

洗濯や汚れに象徴性がこめられ、あるいは星辰の動きと人や

動植物の成長とを相互に連環をなすもの、とみなす諸慣行は、近代的な合理的発想からすれば、たしかに「迷信」であり「奇異な」ものと想定される。しかしそこには、独自の論理一貫性が貫いていることも、たしかなのである。

しばしばキリスト教的な衣をまといながらも、その内実はきわめて強い呪術信仰的性格を示すこの独自の世界を、はっきりと認識するには、洗濯が一例を示すような個別の慣行を、それとして他から切りはなして分析するのではなく、さまざまな相貌をもった人びとの生から死まで、そして日々を暮らし一年を過ごす、その日常生活世界の全体としてのまとまりとの諸関係のなかで、とらえることが必要となるだろう。近代初頭から、そして部分的には中世からすでにこの世界は、たえず外部からせまってくる包摂的な社会とのせめぎあいのなかで、何世紀にもわたって抗争と適応を続けたのち、高度資本主義社会の到来において決定的な変容を経験しなければならなかった。われわれはいま、こうした生活世界の場から近代のなりたちと、その果てとしての現代の高度資本主義社会・国家のなりたちとをおさえかえしてゆかなければならない地点にいる、と考えている。

問一　本文の趣旨を三百字以内で要約せよ。

問二　本文の視点をふまえて、われわれの日常生活の事例から、「近代のなりたち」を四百字以内で論ぜよ。